平成２７年度

美祢市立伊佐小学校

研究主題

自分の考えをもち、他者に伝えようとする児童の育成

～かかわり合いを通して、より質の高い学びを追求する～

１　研究主題設定の理由

現行学習指導要領の実施も５年目を迎え、すでに改訂をめぐる動きが活発化し始めている。次代を担い社会の変化に対応できる「生きる力」をもった子どもたちを育成していくことが、今学校現場に求められている。「ゆとり」でも「詰め込み」でもない、実社会で活用すべき知識・技能をしっかりと身に付けさせなくてはならない。

これまで本校では、「自分の考えをもち、他者に伝えようとする児童の育成」を研究主題として掲げ、授業改善に取り組んできた。この主題は、現行学習指導要領が求めている「生きる力」を育むものであり、中でも「言語活動の充実」と大きくかかわっている。さらに、山口県の教育目標「未来を拓く　たくましい『やまぐちっ子』の育成」、美祢市学校教育基本方針「日本一学びの好きな子どもと教師のいる学校をめざしてⅣ」とも、そのめざす方向性を同じにするものである。日々の授業の中で「自分の考えをもち、他者に伝えようとする」学習活動を意図的に仕組み、「言語活動の充実」を図ってきたところである。これまでの取組で、ある程度の成果を上げることはできた。そこで、本年度はサブテーマとして「かかわり合いを通して、より質の高い学びを追求する」と設定した。これは、学級・他学年・学校・地域の方々など、多様な場面でのかかわり合いに価値を見出し、より質の高い学びを主体的に求めていくような学習活動や指導方法を開発し、児童の表現力や思考力・判断力を高め、たくましく生き抜くことができる人間を育てることをめざしている。そして、考えさせる場面で提示する理解深化問題の研修を進めていくことができる。

平成２６年度より伊佐小・中学校運営協議会を立ち上げ、伊佐地区の子どもたちの９年間の学びを担うコミュニティ・スクールの推進を行っている。ここでは、小中の全教職員、保護者の代表、地域の代表の三者が「まなび・知チーム」「こころ・徳チーム」「からだ・体チーム」に分かれ、小中が連携した継続的・計画的な取組を実施している。「まなび・知チーム」の取組と研修内容をリンクさせることで、多くの人々とのかかわり合いや多様な学習活動の展開が広がるものと期待している。

２　今年度の方向性

（１）　全体構想

＊「知に関して」は

①授業研究　②言語環境の整備　③学習習慣の確立

を柱とし、総合的にアプローチを図る。特に本年度は、仲間（人）とのかかわりを大切にし、一人ひとりが自分の考えをもつ場を意図的に仕組むようにし、全体的に学力が向上するように努める。

＊「徳」に関しては

①道徳授業の充実　②自己肯定感を育むこと、コミュニケーション力をのばすことを意識して、「くん・さんをつけて呼ぶ」　③明るいあいさつ

を柱とし、総合的にアプローチを図る。年間３５時間以上の道徳の授業を充実させ、多様な感じ方や考え方によって学び合う道徳的価値を追求する。保護者・地域と連携したあいさつ運動や心を育てるための「一人一鉢栽培」を継続して行う。さらに効果が上がるように実践を続けていきたい。

＊「体・食」に関しては、

①生活習慣の見直し　②体力づくり運動　③食育

を柱に進める。この活動を継続させ、一人ひとりの生活に目を向け、改善していく。保護者・家庭の果たすべき役割を重視し、本年度はさらに保護者・地域との連携を深めて効果を上げたい。

平成２７年度　研究構想図

美祢市立伊佐小学校

研究主題
自分の考えをもち、他者に
伝えようとする 児童の育成
**～かかわり合いを通して
より質の高い学びを追求する～**

【国語科の授業で】
仮説①　**予習→学習（教えて・考えさせて）→復習を意識した授業を行えば、一人ひとりに確かな力がついていくであろう**

「予習」を活かし、「教えて」「考えさせて」の学習過程を意識した授業づくり※

「めあて」を明確にし、振り返りによる自己評価・授業評価 ※

とも学びの場の支援

言語活動（エンドポイント）の設定と単元計画の工夫

国語の基礎的な力を養う「チャレンジタイム」
**言葉あつめ　短文づくり　漢字学習
やまぐちっ子学習プリント　音読　条件作文等**

【学校教育全体の場で】
仮説②　**相手意識・目的意識を明確にして、人・もの・こととのかかわりをもたせながら、ふるさと伊佐の学びを取り入れることで、他者に伝えようとする意欲や力を高めることができるであろう**

豊かな心を育む読書の推進※
**・今の一冊 ・読書リレー・読書週間
・図書だより ・身近な図書室
・おすすめの本紹介　等**

かかわり合いを意図的に仕組み
伝えようとする発表の場づくり
**・朝 帰りの会（1分間スピーチ）
・詩と歌の会
・ランチトーク 等**

自発的な表現活動をうながす
出会い 体験学習 伊佐(美祢)地域との連携
**・学習発表会　・まごの日参観日
・伊佐学 ※　・クラブ活動
・幼保小連携活動等**

本校のチャレンジ目標
しっかり聴いて　自分がやってみよう

思いを共有する校内掲示の工夫→児童の作品　今月の詩　行事紹介　食育コーナー 等

連　携
学習習慣の確立　言語環境の整備

【家庭・地域の場で】
家庭学習※　伊佐学※　学級PTA活動　地域の方との挨拶運動 等

※小中共通取組

第２学年　国語科学習指導案

指導者　　村　田　淳　一

１　単元名　　じんぶつと自分を　くらべて読もう　～　わたしはおねえさん　～

２　単元について

本学級の児童は、音読練習や読書に積極的に取り組む児童が多く、物語の主人公と自分とを重ね合わせて読んだり、自分が読んだ本の感想を友達と交換したりするなど、豊かな読みにつながる読みをしている児童もいる。今年度、全校で取り組んでいる読書貯金の２年生の目標は１年間で本を百冊読むことであるが、１０月半ばでこの目標を達成した児童もいた。しかし、朝の会や帰りの会では、自分の言いたいことがうまくまとまらず話の途中で長い間立ち止まってしまったり、自分の言いたいことを優先させ相手の話をしっかり聞くことができなかったりする児童もいる。また、作文では、助詞の使い方を間違っていたり、句読点がないまま文章をつなぎ主語と述語の関係が崩れてしまった文章を書いたりする児童もおり、個人差が大きい。

本教材は、２年生のすみれが中心人物（視点人物）であり、２歳の妹（かりん）が学習ノートに落書きをしたことを契機に、本物のお姉ちゃん（本文では、「えらいお姉ちゃん」と表現されている）として大きく成長する様子を分かりやすい文章で表現している。同学年であり、同年齢であるすみれが主人公であることで、児童はすみれの言動に同化したり、自分を重ね合わせて考えたりすることが容易な物語であるといえる。

また、２年生の児童は、今年の春１年生が入学してきたことで、先輩として１年生にいいところを見せたい、笑われるようなかっこ悪いことはしたくないという気持ちをもつことは自然であろう。まだまだ幼さや身勝手さが残る自分と、お兄ちゃん・お姉ちゃんとして年下の子に優しくかっこいいところを見せようとする自分との狭間で揺れ動く心情に、誰もがきっと共感できるものと思う。

そこで指導にあたっては、以下の点について留意していきたい。

・　１から４の各場面ごとに自分と主人公とを比較しながら学習することで、児童の物語に対する興味・関心を高める。また、主人公であるすみれの心情を自分と重ね合わせながら読み取ることで、お姉ちゃんらしく成長していくすみれの変容に気づかせる。
・　追い読み、丸読み、点読み、ペア読み、相づち読みなど様々な読み方で、音読を繰り返し練習することで音読に対する児童の興味・関心を高めるようにし、感情のこもった読み方ができるようにする。
・　自分の考えをまとめたり、友達の意見との共通点や相違点を明確にしたりするために学習ノートを活用するようにし、十分に書く時間を確保する。
・　自分の考えをより深め、友達と高め合うために、ペアによる話合いや少人数による話合い活動をできるだけ多く取り入れる。
・　言葉に対する興味・関心を深め、語彙の幅を広げるために国語辞典を活用し、意味の分からない言葉や大切な言葉の意味調べをする。
・　本単元のエンドポイントは、これまでの自分と比較して変わってきたことやできるようになったことに気づき、自分の成長を作文に書いて発表することとした。また、自分の成長をより確かなものにし、今後もよりよい自分になろうとする意欲を継続するために、作文に対する感想や気づきを保護者に書いてもらうなどの協力を依頼することとした。
・　本単元の『わたしはおねえちゃん』は、石井睦美氏が２年生教科書のために書

き下ろした作品であるが、言うまでもなく原作の『わたしはおねえちゃん』があり、他にも題名にすみれちゃんを冠する作品もある。また、同じ作者の著書や同年代の子どもが登場する作品も多数あり、児童にとってはたくさんの図書にふれる好機である。そこで、本単元の学習に入る少し前から教室に上記の図書を持ち込み、児童に読書を勧めることにし、読書時間の確保を図ることにする。

3　単元の目標

○　主人公すみれの気持ちの変化に気をつけて読み、感想をもつことができる。

○　今の自分と過去の自分とを比較し、変わってきたところやできるようになったことを文章に書くことができる。

【観点別目標】

・　主人公に自分の気持ちを重ねて話を読み進めたり、自分が成長したと思うことを文章に書いたりする。【関心・意欲・態度】

・　友達の話の大事なところを落とさないように聞いたり、話題に沿って話し合ったりすることができる。【話す･聞く】

・　場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことができる。【読む】

・　経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めることができる。【書く】

・　文の中の主語と述語の関係に注意しながら、本を読んだり自分のことを書いたりすることができる。【言語】

4　指導計画（全　１２時間）

小単元	学　習　内　容	評価の観点						時数
		関	話聞	書	読	言語	◎の具体的な内容	
第一次　学習の見通し	○「わたしはおねえさん」を読み、話の大筋をつかむ。　（新出漢字）	○		○	◎	○	・すみれと自分とを重ね合わせ、すみれの言動を共感的に理解する。	1
	○すみれちゃんの言動についての感想を書き、学習課題をつくる。	○	◎	○			・自分の疑問点や感想から学習してみたいことを抽出し、学習課題をつくる。	2
第二次　すみれち	○すみれちゃんの言動から、人物像や理想のお姉さん像をとらえる。【場面１】		○		◎		・すみれの作った歌から、すみれはお姉さんになったことをどう思い、どんなお姉さんになりたいと思っているかを考える。	1
	○お姉ちゃんになれそうでなれないすみれちゃんの気持ちを読み取る。		○				・すみれとコスモスとの関係から、お姉ちゃんになれそうでなれない	1

ゃんの気持ちの変化	【場面２】				◎		すみれの気持ちを考える。	
	○かりんちゃんの書いた落書きに対するすみれちゃんの気持ちをすみれちゃんの言葉から読み取る。　【場面３】		○		◎		・今までの自分からお姉ちゃんになろうとしているすみれの心情の変化をすみれの言動から考える。	**1本時**
	○「あはは。」と笑った後のすみれちゃんの言動から、お姉ちゃんとしてのすみれの成長を見つける。　【場面４】		○		◎		・すみれがお姉ちゃんになったことが分かるところを、それまでのすみれの言動との違いから見つける。	1
	○学習を終えての感想を書き、発表する。	○	◎	○			・初めに読んだときのすみれへの印象と、学習後の印象を比べながら感想を書く。	1
第三次　自分の成長	○２年生になってできるようになったこと、自分なりにお兄さん・お姉さんになったなと思うことを作文に書き、保護者にも読んでもらう。	○		◎			・１年生のときの自分と、今の自分とを比較しながら、成長したなと思うことを作文に書く。	1
	○自分の考えや保護者からの返事を互いに発表する。	○	◎				・自分と友達との考えの共通点や相違点に気づく。	1
第四次　読書	○すみれちゃんが出てくる他のお話や、同年代の主人公が出てくるお話を読み、読書カードを使って友達と情報交換する。 ※学校の図書室や市立図書館の蔵書から次のようなものを選び、読書をする。 ①すみれちゃんシリーズ ②同じ作者（石井睦美）の本 ③同年代の子どもが登場する本	○	◎			○	・人物と自分とを比べながら読む読書の楽しみを広げるとともに、読後の簡単な感想やお薦め度を読書カードに記入し、友達と交換し合う。	2

5　本時案（第２次　３／５）

（１）　ねらい

すみれの言動から、かりんの書いた落書きに対するすみれの気持ちを読み取ったり想像したりする。

（２）　準備物　　ワークシート、センテンスシート

（３）　学習過程

過程		学習活動・内容	児童の意識の流れ	教師の支援【評価】
予習		【予習】（家庭学習） お姉さんらしいすみれと、そうでないすみれを見つける。	・ノートに落書きされて泣きそうになったり怒りそうになったりするすみれは、えらいお姉さんではないな。 ・落書きされても妹に文句を言わないすみれはえらいお姉さんだと思うな。	・自分とすみれとを重ね合わせ、自分だったらどうしたかを考えながら読んでみよう。
教える	説明5	**1　学習課題をつかむ。** ・めあての確認	・すみれがえらいお姉さんになったかどうか、学習するのだな。	○前時の学習から、すみれは、えらいお姉さんになることを目標にしていることを確認する。
		すみれちゃんは、えらいおねえさんになれただろうか。		
考えさせる	理解確認20	**2　３の場面を読み、すみれの心情をとらえる。** ・かりんにノートに落書きをされたことを知ったとき ・かりんの描いたぐちゃぐちゃの絵をじっと見たとき	・もう泣きたくなってしまっている。 どうしてそんなことをしたのかと、怒り出しそう。 ・自分が叱られたらどうしよう。 どうしたらいいか分からない。困ったなあ。	・「もう、かりんたら、もう。」というすみれの短い言葉のなかに、「もう」が二回もあることに着目する。 ・じっと、ノートを見ているすみれの気持ちを、すみれの立場になって想像してみる。 【読】会話文の前後の記述から、すみれの気持ちをとらえることができたか。
	理解深化15	**3　すみれの心情の変化を考える。** ・水をやったばかりのコスモスを見たあともう一度ノートを見たとき	・大好きなコスモスが笑っている。怒ってはいけないな。 ノートを出しっぱなしにしておいた自分が悪いのだし、かりんちゃんは何も分からないもんね。	・もう一度ノートを見たときのすみれの気持ちは、初めてノートを見たときと変わっているか想像する。 ・許してあげようという気持ちが出てきたことに気づかせたい。 【話・聞】もう一度ノートをじっと、ずっと見たときのすみれの気持ちを想像し、友達と話し合うことができたか。
	自己評価5	**4　すみれは、えらいお姉さんになれたかどうかを予想し、次時の学習を知る。** ・振り返り	・落書きしたかりんちゃんを怒らなかったからえらいお姉さんになったのではないかな？ ・落書きをどうしたらいいか、まだ悩んでいると思う。	・ノートに落書きをされたことに対するすみれの気持ちの変化から、えらいお姉さんになれたかどうかを予想させる。 ・予想に自分の考えがしっかり書けるかどうかで、本時の振り返りにする。

6　授業を終えて

本時のねらいは、妹のかりんが書いた落書きに対するすみれの気持ちの変化を、会話文やその前後の地の文から読み取ることで、すみれの心の成長に気づかせようとするものであった。しかしながら、２年生にとっては、会話文からすみれの心情を推測することは可能であるものの、地の文から人物の心情を読み取ることは難しいようであった。特に、本時のねらいにかかわる「それで、じっと、ノートを見ていました。」という記述と、「すみれちゃんは、もういちど、ノートを見ました。じっと。ずっと。」という記述の対比からすみれの心情の変化に迫るという課題については、「じっと見ていた。」という時間や状態の同一性に終始し、その背後に隠れた心情の変化に気づく段階までには至ることができなかった。したがって、本時のめあては、「すみれちゃんは、えらいおねえさんになれただろうか。」という本時を学習しての結論的なものではなく、すみれの心情の変化にかかわる課題－例えば、「すみれの気持ちが大きく変わったのは、どうしてだろうか。」といったものにした方がよかったと思われる。こうすることで、子どもたちは、すみれの心情の変化のみを考えればよいことになり、会話文やその前後からすみれの心情を読み取ることが可能となると考えられる。

授業風景

また、本時のねらいを引き出す発問がしっかりと練られていなかったことも、大きな反省材料の一つである。中心発問がぶれてしまうことで、すみれの心情の変化に迫るプロセスが曖昧となり、会話文から読み取れるすみれの心情を想像し、時系列に沿って追体験することに終始してしまった。すみれの心情の変化を的確に把握するためには、「すみれの気持ちは、どこで変わったのだろうか。」といったすみれの心情のターニングポイントを尋ねる発問が必要であった。すみれの気持ちが変化したところを探ることで子どもたち一人ひとりの読みをより深くし、すみれの言動と自分自身との経験とを比較しながら考察することで、すみれの心情の変化をより詳しく読み取ることができると思われる。

ペア読みの様子

授業においては、子どもたちの思考をいかに活性化し、豊かな発想を引き出すかが大きなポイントである。そのためには、よく練られた授業計画と、その計画に即したねらい、そしてそのねらいに迫る中心発問（主発問）が必要である。今回の授業では、子どもたちの考える力を養うために、読み取りや心情の理解に力点を置いた授業を展開した。果たしてどこまで迫れたのか、反省することしきりである。

今回の授業研究会では、多くの先生方からたくさんのご教示をいただいた。あらためて、感謝の意を申し上げたい。

第４学年　国語科学習指導案

指導者　佐藤　　恭治

１　単元名　　物語を読んで、友達に紹介しよう　「プラタナスの木」

２　単元について

本学級の児童は、国語科の学習について、特に物語文を好んではいるが、語彙力が不十分であるため、聞き取り、読み取りが確かではない児童も多い。しかし、最近では内容の読み取りに積極的に取り組むようになり、発言も増えてきた。

物語単元では、音読すること、視写することを絶えず投げかけてきた。１学期「白いぼうし」では、内容の理解を重点的に叙述に即して読ませ、「一つの花」では、場面毎の人物の心情の変化の読み取りを中心に授業をした。また、“「読むこと」について考えよう”では、感想文の書き方を学ばせた。そして、前単元「ごんぎつね」で“読んで考えたことを話し合おう”で、自分の考えを持たせ、意見や考えの交流会を行わせた。その結果、文章の内容の理解については、少し深まってきたように感じる。また、内容をつかんだ上で、自分の考えがもてるようになり、意見の交流が積極的になってきた。

本単元は、物語を読み、登場人物の行動から気持ちを考え、心に残ったことをもとに、進んで内容を紹介することがねらいである。

「プラタナスの木」は、マーちんを中心とする仲良し四人組が、不思議なおじいさんの話や公園にあったプラタナスの木がなくなってしまったことによって、自然に対する思いや考え方が変化し、成長していく話である。おじいさんが教えてくれた木の話に興味をもったり、『新しい芽を出すまでぼくたちがかわりだ。』というマーちんたちの思いや発想に共感したりする児童も多いと思う。また、不思議なおじいさんとプラタナスの木を重ねて読む児童もいるだろう。この他にも多様な見方ができる作品である。

登場人物も同世代の子ども達で同化しやすい。場面の移り変わりも、時間の変化にそって段落分けがしてあるので、内容の理解は難しくないと思われる。何気ない日常を描いた親しみを感じる作品なので、話のあらすじをつかみ、友達に紹介するカードを作る活動の設定ができ、意欲をもって取り組める教材であると考える。

指導にあたっては、文章をしっかり読ませ、内容を理解させた上で、物語のあらすじをつかませ、自分の感想を一文で表した楽しい紹介カードを作らせたい。

そこで次の点に留意したい。

①物語の内容を確かにつかませる。

場面のうつり変わりを時間を追って表にまとめさせることで、おおまかな話の流れをつかませる。その上で、最初と最後で変わったことに目を向けさせ、登場人物の気持ちの変化について考えさせたい。

②自分の感想を一文で表現させる。

自分の考えを大事にし、友達と意見交流をする活動を多く仕組みたい。その意味でも、まず自分で考え、素直な感想を大事にしていきたい。また、交流する時間をきちんと確保し、考えを広げさせたいと考える。そのために、必ず自分の言葉でノートに書かせるようにしたい。個人差が大きいので、考えが深まらない児童への支援を確実に行っていきたい。

③物語の本文から心に残ったところを引用させる。

学力状況調査の様子から、根拠となるところを文章から見つけ、引用して考えをまとめ、

文章を書くことに課題のある児童が多い。紹介カードを作る活動で、心に残ったところやおもしろい場面を本文から抜き出してまとめることを取り入れてみたい。

④紹介カードを作って発表することをエンドポイントとする。

国語科の授業と並行して個人読書を進め、授業で学習したことをもとに、自分の“おすすめの本”の紹介カードを作って発表することをエンドポイントにする。

3　単元の目標

〇物語を叙述に即して読み、あらすじについて理解することができる。

〇カード作りのために、本文を引用したり心に残ったことを表したりすることができる。

【観点別目標】

・進んで文章を読み、紹介カード作りに意欲的に取り組むことができる。
【関心・意欲・態度】

・自分の考えを最後まできちんと発表し、友達の意見を正しく聞くことができる。
【話す・聞く】

・あらすじをとらえ、短くまとめて文章に表現することができる。【書　く】

・本を紹介するために、本文を引用したり、要約したりすることができる。【読　む】

・考えたことや思ったことを表す言葉を意識して書いている。【言語事項】

4　指導計画（全１０時間）

小単元	学習内容	評価の観点						時数
		関意	話聞	書	読	言語	◎の具体的な内容	
第一次 内容の理解	全文を読み、学習計画を立てる。また、初発の感想をもつ。	◎			〇		物語の登場人物に寄り添って、読みを進め、初発の感想をもとに学習の見通しをもつ。	1
	登場人物を中心におおまかな場面設定を考える。				◎	〇	深く読み進め、登場人物と場面設定を理解する。	1
	場面毎に詳しく読み、場面の移り変わりを考えて、あらすじをまとめる。		〇		◎		場面の移り変わりを考えて、あらすじをまとめる。	2
第二次 紹介カード作り	物語の感想を自分の言葉で一文で表現する。	〇				◎	心に残った言葉をもとに、感想を一文で表現する。	1 本時
	『プラタナスの木』の紹介カードを作る。	〇		◎			本文の言葉や、自分の感想をもとにして、紹介カードを作る。	2
	自分のおすすめの本の紹介カードを作る。			◎		〇	前時までの学習をもとにして、自分のおすすめの本の紹介カードを作る。	2
	紹介カードの発表会をし、学習を振り返る。	◎	〇				自分のカードと友達のカードを比べ、学習を振り返る。	1

5　本時案（２次　１／６）

（１）ねらい　　心に残った言葉や場面の移り変わりに目を向けることで、物語の感想を一文で表現することができる。

（２）準備物　　なし

（３）学習過程

段階		学習活動・内容	児童の意識	教師の支援【評価】
予習		【読む】（家庭学習） ・“プラタナスの木”の音読をする。	・正しく読もう。 ・わからない言葉の意味を調べておこう。	・正しく読むように言葉がけをする。 ・進んで意味を調べるように言葉がけをする。
教える	理解確認 15	1　前時を振り返り、“プラタナスの木”のあらすじを確認する。 ・音読 ・あらすじ	・マーちん達の話だったな。 ・プラタナスの木が台風でなくなってしまったんだ。	・場面の移り変わりを意識させて、時間の経過にそってあらすじをまとめる。
		2　本時のめあてを確認する。 ・めあて、見通し	・むずかしいめあてだなあ。 ・がんばってやってみよう。	・難しい課題であるが、自分の思いを大事にして考えさせる。
		本文から好きな表現を見つけ、自分の感想を一文にまとめよう		
考えさせる	理解深化 20	3　本文を読み、好きな言葉、表現を見つける。 ・心に残った言葉 ・好きな表現	・『ぼくたちのプラタナス公園』 ・『きっとまた、おじいさんにも会える。』 ・『ぼくたちがみきや枝や葉っぱの代わりだ。』	・好きな言葉や表現のどこがいいのかを考えさせる。 ・なかなか見つけられない児童には、個別に支援する。
		4　見つけた言葉や表現をもとに、自分の感想を一文で表現する。 ・言葉、文	・マーちん達がプラタナスの木の代わりをするお話。 ・マーちん達とプラタナスの木、不思議なおじいさんのお話。	・できるだけ好きな言葉や表現を使って、まとめさせる。また、物語の初めと終わりで変わったことに目を向けさせる。 【言語】友達の表現を参考に、自分の言葉でまとめることができたか。
	自己評価 10	5　まとめた文を発表する。 ・発表	・○○君のはよかったな。 ・○○さんのをまねしてみよう。	・グループ内で発表をさせる。
		6　本時の学習の振り返りをする。 ・まとめ ・紹介カード	・むずかしかったけど、自分の言葉で書けたよ。 ・次は、紹介カードを作るんだな。	【関意】自分の言葉でノートに振り返りを書くことができたか。 ・次時の活動を予告する。

６　考察

（１）　予習について

学年当初から、国語科の予習は、とにかく音読と視写に力を入れてきた。その成果が、授業の最初の音読にも感じられるようになってきた。ほとんどの児童が、文章の初めの部分は覚えて暗唱できるようになっていたからだ。本単元の留意点の①に挙げた「内容を確かにつかませる。」ことも、音読をしっかりしたことで、ある程度できたのではないかと考える。授業後の協議会でも、「しっかり音読ができていた。」との感想をいただいた。今後も音読については、引き続き力を入れていきたいと思う。

（２）　教える場面について

本時の中で、「教える」場面はどこかを考えると、感想を短い言葉でまとめるための手だてを教えることだと思う。やり方を教えることで、自分の力でまとめることができるようにさせたいと考える。そこで、本時は「心に残った言葉」「好きな表現」をノートに書き出す活動を取り入れた。全員がいくつかの言葉をノートに書き出していたので、次の感想をまとめる活動がスムーズにできたように思う。

（３）　理解確認について

理解確認の問題として、全員であらすじの確認を行った。時間の変化を表す言葉をもとに、場面を振り返らせたことで、内容はよく理解できていたように思う。また、本文が身近な物語であり、音読をしっかりやらせたことも要因であると考える。

最終的に、紹介カードを作るためにも、この確認は大切であった。授業後、一人ひとりで紹介カードを作成したが、理解不十分でも話の筋はよく理解していたように思う。

（４）　理解深化課題について

本時のめあては、感想を一文で表すことであった。あらすじがわかり、好きな表現も見つけることができたので、児童一人ひとりが意欲をもって取り組めたと思う。結果、本時の中で全員が自分の言葉でまとめることができた。

しかし、それが本当に物語の主旨をとらえたものであったかどうかは課題が残る。協議会でも、感想なのか、説明なのか、はっきりさせるべきではなかったかという意見を多くいただいた。もう少し時間をかけ、よりよい表現を吟味する時間が必要であったかもしれない。

【自分の感想をまとめる】

（５）　かかわりあいについて

「かかわりあい」は、本校の研修テーマである。そこで、１学期当初から、すべての教科で多くのかかわりあいの場面を設定してきた。となり同士でのペアトーク、近くの人との話合い、グループ・全体での話合い・・・。いつもの活動なので、本時でも積極的に活動し、意見交換を行っていた。内容の本質に迫るような話合いの質には高まらなかったが、少しずつ知的な高まりを感じる。

本学級は、児童の個人差が大きく、なかなか深まりのある学習を仕組むのは難しい。しかし、教師の工夫によって、深まっていくと信じる。児童一人ひとりが意欲的に課題に取り組むために、かかわりあいを大事にした授業づくりに力を入れたいと思う。

【ペアで意見交換をする】

第６学年　国語科学習指導案

指導者　唐崎　麻美

１　単元名　　筆者のものの見方をとらえ、自分の考えをまとめよう
　　『鳥獣戯画』を読む

２　単元について

○　本学級の児童は、授業の中でのペアトークやグループトークにおいて、自分の考えを友達に説明したり話合いをしたりすることができる児童が多い。しかし、全体の発表場面になると、発表をしようとする気持ちはあるが、恥ずかしさや自信のなさから、自分の考えを発表できなくなる児童もいる。また、自分の思いを書いたり文章を写したりするなどの書く活動に抵抗がある児童がおり、個人差が大きい。

　しかし、朝のスピーチや授業などでは、自分の考えをもち発表する機会を重ね、少しずつ全員の前で発表することに慣れてきた。「笑うから楽しい／時計の時間と心の時間」では、筆者の主張と事例の関係を押さえながら学習した。また、筆者の主張に対する自分の意見や「時間」についての自分の考えを書く活動を行い、友達と意見を交流する活動を行っている。

○　「『鳥獣戯画』を読む」は、筆者の絵に対する解釈と、評価が述べられた評論文としての特徴をもっている。筆者のものの見方（解釈・評価）とその対象が明確に表されているため、筆者のものの見方をとらえやすく、自分の見方と比較することができる教材である。絵と文章を照らし合わせながら読むという読みの方法を身に付けたり、体言止めや語りかける表現、読者を引き付ける表現など、ものの見方や感じ方を伝える筆者の工夫を学んだりすることができる教材である。

　また、筆者のものの見方や考え方に触れることによって、「鳥獣戯画」などの絵巻物は、歴史的価値や世界的価値があることを知ることができる教材である。絵巻物が文化として深く息づいてきたことを知り、日本の伝統文化の深さにもふれることができる。また、私たちの生活の中にある絵画や音楽などの多様な芸術などへの視野を広げることができる。

○　そこで指導にあたっては、次の点に留意して学習を進めていきたい。

【導入の工夫】

　授業の導入時に、「鳥獣戯画」や絵巻物についての読み聞かせを設定したり、平安時代の絵巻物を紹介したりすることで、絵巻物への興味をもたせる。また、色々な絵巻物を見ての気づきを述べる場を設定する。

【絵や絵巻物と文章を照らし合わせながら読むこと】

　この教材では、筆者の着眼点・評価の仕方を読み取らせることが大切である。そこで、効果的に読む方法を学ぶことができるように、筆者が絵や絵巻物の「どの部分」を取り上げ、「何に着目し」「どう評価しているか」を色分けをしながら丁寧に読み取っていくようにする。

【エンドポイントの設定】

　エンドポイントでは、解説者になりきって『鳥獣戯画』の二つの場面のいずれかを解説する活動を設定する。前時までに学習した筆者の着眼点・評価語彙・表現の仕方を生かして解説することで、筆者のものの見方を読者へ伝えるための工夫と効果について更に深く理解させたい。

【ペアトーク・グループ活動の設定】

　筆者の見方をとらえたり筆者の表現や構成の工夫を見つけたりする活動や「鳥獣戯画」を解説する場面には、ペアやグループでの話合いを取り入れ、考えを広げることができるようにする。

3　単元の目標

○　絵と文章との関係を押さえて筆者の考え方をとらえ、自分の考えを明確にしながら読むことができる。

○　文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりできる。

【観点別目標】

・　筆者の見方や感じ方と自分の感じ方を比べながら読み、感想を述べようとしている。【関心・意欲・態度】

・　絵のどの部分を取り上げ、何に着目し、絵や絵巻物をどう評価しているかについて読み取っている。【読む】

・　表現や構成の工夫について考えながら読むことができる。【読む】

・　筆者の評価や表現の仕方に対し、自分の考えを書いている。【書く】

・　文末表現や助詞の使い方を意識して読んでいる。【言語】

4　指導計画（全７時間）

小単元	学　習　内　容	評価の観点						時数
		関	話聞	書	読	言語	◎の具体的な内容	
第一次 学習の見通し	筆者の作品に対する見方をとらえ、ものの見方を広げる。	◎			○		筆者のものの見方・感じ方に関心をもって読もうとしている。	1
第二次 筆者の絵に対する見方と表現の工夫の読み取り	絵と文章を照らし合わせながら、筆者の見方をとらえる。			○	◎		絵と文章を照らし合わせながら、絵のどの部分を取り上げ、何に着目し、どう評価しているかを読み取ることができる。	1
	絵巻物と文章を照らし合わせながら、筆者の見方をとらえる。			○	◎		絵巻物と文章を照らし合わせながら、絵のどの部分を取り上げ、何に着目し、どう評価しているかを読み取ることができる。	1
	絵巻物や『鳥獣戯画』に対する筆者の評価・解釈について自分の考えをもつ。			○	◎		筆者の主張の根拠を読み取り、理由を明確にして自分の考えをまとめることができる。	1
	考え方を効果的に伝えるための表現や構成の工夫を考える。				○	◎	表現や構成の工夫について、その効果や筆者の意図を考えている。	1
第三次 解説文の作成	自分が選んだ場面を筆者の着眼点・評価語彙・表現の工夫を生かして絵の解説文を書く。		○	◎			自分が選んだ場面を筆者の着眼点・評価語彙・表現の工夫を生かして絵を解説することができる。	1本時
	自分が書いた場面の解説文を交流し、単元を振り返る。	○	◎				完成させた解説絵巻を読み合い、筆者のものの見方を読者に伝えるための工夫と効果について理解を深める。	1

5　本時案（第３次　　１／２）

（１）ねらい

筆者の着眼点・評価語彙・表現の工夫を生かして、『鳥獣戯画』の絵について解説文を書くことができる。

（２）準備物

筆者の着眼点・評価語彙集・筆者の表現の仕方の掲示物、鳥獣戯画の絵、ワークシート

（３）学習過程

過程		学習活動・内容	児童の意識の流れ	教師の支援【評価】
予習		【予習】（家庭学習） ｐ141の蛙の絵について自分で解説文を書いてくる。	・こんな言葉を使ってみよう。 ・絵を詳しくみていくことが大事だな。	○自分がどこを見て、どう感じたかを書いてくるように伝える。
教える	説明 10	1　本時のめあてを確かめる。 ・解説文の発表 ・めあての確かめ	・蛙の絵の解説文は人によって違うんだな。 ・もっと上手に解説文を書きたいな。	○予習をすることで、もっと上手に解説文を書きたいという意欲づけや方向付けを行う。 ○どこに着目したかが分かりやすいように、蛙の絵と照らし合わせる。
		筆者の表現の工夫を参考にして『鳥獣戯画』絵巻の解説文を書こう。		
		2　筆者の表現の工夫を確認する。 ・筆者の着眼点や評価語彙、表現の工夫	・筆者の表現の工夫を使って書くと上手に解説文が書けそうだな。	○予習を生かしながら、筆者の着眼点や評価語彙、表現の工夫を確認する。 ○解説文を書くときの参考になるように、表現の工夫を掲示する。
		（大切） ①見る場所や見る方法を表す表現＝筆者の着眼点 ・動物の体の線・表情・動き・体のパーツ・筆遣いなど　・形・大きさ・太さなど ②読み取ったことや感じたことを表す表現＝筆者の評価語彙集 激しい・いい・おかしい・楽しい・見事だ・自然だ 「さも～のように」「さすが」「好ましい」「優れている」など ③筆者の表現の工夫 ・書き出しの工夫　・文末の工夫（体言止め・常体） ・読み手を引き付ける言葉の工夫 「～ごらん」「～かな」「どうだい」「そう、きっと」 ・読み取ったことを表現する方法「見える、感じる、聞こえてくる、伝わってくる」		
	理解確認 10	3　筆者の表現の工夫を生かして解説文を書く練習をす	・どんな書き出しにしようかな。 ・予習の時より文がよ	○書き出しを工夫することを伝え、表現の工夫をするよさに気づかせ

考えさせる		る。 ・書き出しの工夫 ・ペアトーク	くなったな。	る。
	理解深化 20	4　自分の選んだ絵の解説文を書く。 （弓矢の場面・追いかけっこの場面） ・グループトーク ・表現の工夫を選択 ・解説文を書く	・どんな場面なのかな。 ・解説文が書けるかな。 ・どの表現の工夫を使おうかな。 ・兎はどんな気持ちだろう。 ・まずは、書き出しを考えよう。	○文を掲示し、解説文をイメージしやすくする。 ○同じグループで話合いをし、自分の解説したい部分が見つかるようにする。 ○書くことが苦手な児童の手立てとして、ワークシートを用意したり、声かけをしたりする。 【書】筆者の着眼点・評価の仕方・表現の工夫を生かしながら解説文を書いているか。
		5　解説文を交流する。 ・各グループでの解説の交流 ・全体での発表	・みんなの書いた解説文を聞くのが楽しみだ。 ・同じ場面なのに、解説の仕方が違うな。	○友達の解説文のよさに気をつけながら聞くことを伝える。
	自己評価 5	6　今日の学習の振り返りを書く。 ・振り返り	・表現の工夫を入れた解説文が書けたよ。 ・難しかったな。 ・友達の解説文は上手に書けていたな。	○めあてに対する振り返りや交流して感じたことを記述できるようにする。

6　考察と課題

（１）予習について

事前学習として、教科書に載っている蛙の絵について自分で解説文を書いてくるようにした。筆者の評価語彙を使って書いてくる児童がいれば、思いついたまま解説文を書いている児童もいたが、予習には全員取り組んでいたため、授業の導入がスムーズに行えた。予習したことを前もってワークシートに書かせ、児童に発表させた。研究協議では、この時に、教えること『大切』を同時におさえていくことで、時間短縮につながったのではないかという意見をいただいた。

（２）教える場面について

教える段階では、筆者の着眼点・評価語彙・表現の工夫の三つを全体で確認した。確認する時に、表現の工夫をカードにして一つずつ確認したことで、筆者の着眼点・評価語彙の印象が薄くなった。協議会では、児童が解説文を書く時に、「さも～のように」や「顔をみると」などの表現が少なく、筆者の着眼点・評価語彙についての意識が弱かったことが反省点として出た。

（３）理解確認について

理解確認問題として、全員で「書き出しの工夫」を行った。書き出しの工夫に絞った理由は、予習してきた解説文への工夫の書き込みでは、工夫の仕方が広がりすぎると考えたためである。まずは、全員が書き出しを工夫することで、色々な書き出しがあることの面白さや、工夫することの良さを実感させたかった。児童が書いた書き出しの中で多かったのは、擬声語や会話を使ったものだった。書き出しが書けない児童には、早く書けた児童の書き出し文を紹介することで、全員が書くことができた。

（４）理解確認問題について

理解確認問題として、事前に選んでいた二つの場面について解説文を書く活動を行った。まず、場面から気づいたことをグループトークさせた。その後、児童に三つの工夫を選択させた。協議会では、全員共通で「常体で書くこと」と「一文にすること」を決めた後に、三つの工夫を入れることにしたので、工夫は一つでもよかったのではないかと意見が出た。また、それぞれの場面で書く動物を限定したので、周りの背景の様子や動物と動物の関係など、範囲に広がりのある解説文が少なかったように感じた。

（５）かかわり合いについて

児童は、普段の授業からペアトークやグループトークに真剣に取り組むことができる。このことは、本校が、かかわり合いを大切にした授業づくりに取り組んでいるからだと考える。本時でも、『大切』の確認・書き出しの交流・絵で交流の三つの場面でペアトーク・グループトークを取り入れたことで、考えを深めたり広げたりすることができた。これからも児童の意見をしっかり聞き、さらには児童同士が学び合える授業づくりに励んでいこうと思う。